

『枠組み』を断絶するものとその架橋

——アルヴァックスがベルクソン批判のためにプラトンのイデア論を参照した謎を追って——

武内 保

1 はじめに

モリス・アルヴァックスは一九二五年、『記憶の社会的枠組み』(以下、『枠組み』と記す)を著した⁽¹⁾。同書の革新性を一言で表すすれば、ふつうきわめて私秘的であると思われる記憶現象を、きわめて社会的・集合的な現象として説明しようとしたことにある。これをもってして、「記憶の社会学」が誕生した、と現在の視点からは言える。

ところが、『枠組み』には断絶があることがこれまでに指摘されている(Namer 1994: 335; 鈴木 2018: 392; 金 2020b: 106)。つまり、記憶の社会学はある種の欠陥を負った状態で生まれたのである。

まずは、同書の構成を見てみよう。

序文	
第1章	夢と記憶イメージ (Le rêve et les images-souvenirs)
第2章	言語活動と記憶作用 (Le langage et la mémoire)
第3章	過去の再構成 (Le reconstruction du passé)
第4章	記憶の位置づけ (La localisation des souvenirs)
第5章	家族の集合的記憶作用 (La mémoire collective de la famille)
第6章	宗教の集合的記憶作用 (La mémoire collective religieuse)
第7章	社会階級とその伝統 (Les classes sociales et leurs traditions)
結論	

(1) 本稿では、*memoire*と*souvenir*という二つの記憶概念にそれぞれ「記憶作用」、「記憶(内巻)」という訳語を付す。ただし、すでに邦訳のある論考に関しては既存のタイトルに従う。

各章題だけを見ても分かるように、第1〜4章と第5〜7章とのあいだには議論の水準上、明らかな違いがあり、おのずと2つのセクションに分かれる。前半セクションでは、アルヴァックス自身が「結論」冒頭で「本書の前半部分では、心理学者たちの議論をあえて彼らの領域のなかで辿った」(CS 273 = 358) と振り返っているように、心理学的分析がおこなわれている。対して後半セクションでは、家族・宗教・社会階級といった社会集団を対象にした、社会的・歴史的分析がおこなわれている。金瑛は、このように『枠組み』が二つのセクションに分かれることについて、次のように書いている。「記憶の社会学は、この心理学的記述と歴史学的記述の間にある断絶を理論的に架橋するものでなければならぬだろう。だが、『枠組み』におけるアルヴァックスは、個人の心理的な次元と集団の歴史的な次元がどのように交差するののかについては十分に説明していない」(金 2020b: 106)。

浜日出夫 (2002) によれば、記憶の社会学とは「心理学にゆだねられてきた記憶という領域を、社会学の対象として捉え直そうとする試み」である。この設定に照らしてみると、『枠組み』の断絶は、社会学が捉え直そうとした「心理学に委ねられてきた記憶という領域」／「社会学の対象として」の記憶という領域の断絶であると言える。

とはいえ、社会学と心理学とでは記憶現象の把握の仕方が異なる、

あるいは、それぞれで想定される記憶それ自体が異なることを前提にして、その二領域のあいだに境界線を引くことはもちろん可能であるし、社会学の記憶研究を目指す場合、程度はどうであれ、そのような境界線が要請されるのは必然でさえある。

実際、浜は「記憶の社会学・序説」(2007) で、アルヴァックス理論を参照しその理論の空間性・物質性を強調したうえで、社会学における記憶研究を、ピエール・ノラのいう「『記憶の場』とそれにかかわる人びとの活動」(浜 2007: 78) の観察に限定しようとする。そしてその論考の終わりでは、それが理念型であるという留保を付しつつ、社会学の記憶研究と心理学との違いがまとめられている。

だが、浜の設定は別の受け取り方ができる。というよりも、上の設定をリテラルに受け取れば、問われるべきはむしろ、アルヴァックス(社会学)が「心理学に委ねられてきた記憶という領域」をいかに「捉え直」したのかという、社会学と心理学・精神分析などとの緊張関係にあるはずだ。このように受け取れば、浜の設定は『枠組み』の断絶をめぐる金の問題意識を包含するものになる。

ここまで確認してきたことを含め、本稿の関心を四つの問いとして整理しておきたい。第一に、いま提起した、『枠組み』の断絶はどのようなものであるのか、という問い。第二に、アルヴァックスはこの断絶を架橋しようとしたのだろうか、という問い。第三に、架橋しようとしたのなら、それはどのような企画であったのか、それは上手くいっているのか、という問い。第四に、現在の社会学は

『枠組み』の断絶を引き起こしたものを乗り越えているのだろうか、という問い。これらの問いはアルヴァックス理論に内在的なものであるが、それは、『枠組み』の断絶を覗くことを通して、記憶の社会学という領域を始まりの地点から問い直す試みでもある。

以下では、このうち主に第二と第三の問いに取り組み、それによって第一の問いにあらためて回答しつつ、現在の視点から反省的に第四の問いに至るというルートを採る。

だがその前に、あえて議論を先取りして、第二・三の問いについてここで回答しておきたい。本稿は金同様、アルヴァックスは『枠組み』を断絶するものを架橋していないと考える。しかし、彼はそれを架橋しようとしていたとも考える。問題は、どのように失敗したのか、ということだ。

2 アルヴァックスの心理学的分析

2-1 『枠組み』の断絶と謎

さて、まず問題になるのは、『枠組み』の心理学的分析についてである。

アルヴァックスは『枠組み』前半セクション（第1〜4章）の試みを「記憶作用の社会学理論」(CS VIII = 10)と呼んでいる。つまり、アルヴァックスの心理学的分析は、「記憶作用」をめぐってなされたと理解しうる。

この記憶作用という概念は、アルヴァックスのリセ時代の師アンリ・ベルクソンから引き継がれたものである。アルヴァックスはベルクソン哲学から「記憶作用 (mémoire)」と「記憶 (内容) (souvenir)」という二概念とその区分を継承した。その意味内容をよく簡潔に示せば、前者はある過去を記憶として表現する作用・力であり、後者は記憶作用によって表現された記憶である。この区分は『集合的記憶』(1950)にまで適用されている。

アルヴァックスはそうして、かつての師の哲学を部分的に継承した。だが、彼のテキストにおいてはむしろ、ベルクソンに対する逆張りのな記述のほうが目立つ。『枠組み』前半セクションはベルクソン哲学に支えられる一面をもちながらも、その哲学に真正面から挑戦状を突きつけるというアンビバレンスから成っている。

しかし、記憶作用と記憶という概念区分を含め、ベルクソン哲学がアルヴァックスにあたえた影響は従来、あまり考慮されてこなかった。それどころか、ベルクソンとの直接対決が図られた『枠組み』前半セクションそれ自体が十分に検討されてこなかった(金2020b: 10-1; 鈴木2018: 393)。

たとえば、『枠組み』を英訳したルイス・コーザー(1992)は、アルヴァックス理論のうち、想起を、現在の視点からの過去の再構成であるとみなす、「過去の再構成論」を殊更に強調したうえで、その理論を現在主義であると紹介し批判している。コーザーの解釈はこれまでひろく受け容れられてきたものの、実際にはアルヴァッ

クス理論を現在主義に切り詰めて理解するには無理がある（『金 2020b: 89-95』）。にもかかわらず、コーザーがそのような単純化に走ってしまったその様子は、彼が『枠組み』を英訳する際に前半セクションを抄訳で済ませていることから間接的に窺い知ることができる。そして、彼がその英訳版のある注釈のなかで『枠組み』を抄訳したことのエクスキューズとして漏らしているのが、同書第1〜4章の心理学的議論は第5〜7章の社会学的考察のための「準備」である、という認識なのである（Halbwachs 1992: 37）。

アルヴァックスの心理学的・哲学的議論が軽視されてきたことは、彼の理論が一般に「集合的記憶論」と呼ばれ、この名がもつ雰囲気・頼りに理解されてきたことを示している。この名によって認知される場合、その理論は集合的アイデンティティをめぐる記憶の政治学に重ねられていると言ってもよいだろう。

ただし、『枠組み』の後半セクションは、金曰く「現代の社会学におけるいわゆる『集合的記憶論』にも馴染みややすい部分だと言える」（金 2020b: 10）。すなわち、アルヴァックス自身が実際にそのような「集合的記憶論」を論じ、かつそうした側面を強調してもいる。その理論は後世の論者だけでなく提唱者によっても、古典的な記憶の政治学につらなるような、社会的側面にアクセントが置かれてきたのである。

アルヴァックスは『枠組み』を断絶する二つの分析視角を架橋しえなかった。だがだからといって、その心理学的分析はたんなる「準

備」に過ぎないと評価するのはあまりに早計だろう。むしろ、「記憶作用の社会学理論」／「集合的記憶論」のあいだに断絶を観察できること自体に大きな意味がある。

そして、「記憶作用の社会学理論」がいかに構想されたのを知ろううえで、ひいては『枠組み』の断絶を問ううえで、最大の参照点となるのがベルクソン哲学なのである。

ところが、いざそうした針路を採ろうとすると、ある壁にぶつかるところが、アルヴァックスがベルクソン批判をプラトンとスピノザのイデア論を参照しながら論じようとしているという謎である。ふつうに考えれば、イデア論を参照することは記憶現象を西洋哲学的伝統とは異なる位相において把握しようとしたアルヴァックスの思惑に反している。だが、彼はそのことを十分には説明してくれていない。では、どうすればよいのか。

2-1-2 アルヴァックスとベルクソン

そこで次に、アルヴァックスとベルクソンの違いを整理しておく。

アルヴァックスは、ベルクソン哲学を社会学の視点から乗り越える、あるいは批判的に継承することを「記憶作用の社会学理論」の主戦略としている。では、ベルクソン哲学のなにを批判しようとしているのか。

ジュラール・ナメルは、それまで心理学を学んでこなかったアル

ヴァックスが、なぜ4年以上もかけて『枠組み』に取り組んだのか、なぜベルクソン哲学を標的にしたのか、そしてなぜ一九二五年だったのか、と問うている (Namer 1994: 318)。

ナメルの見立てによれば、『枠組み』の刊行は、心理学主義と社会学の戦い、スピリチュアリズムと合理主義の戦い、エミール・デュルケームの後継をめぐるライバルたちとの戦いに挑むものであった (Namer 1994: 305)。ここには、第一次世界大戦末期にデュルケームが死に、デュルケーム学派全体もまた戦争によって大きなダメージを負っていたその裏で、大戦後も生き残ったベルクソンが合理主義にも社会学にも勝利を収めていたという事情がある。

ヨーロッパでは大戦以前から、合理主義をその存立原理とする西欧近代文化への反感が生まれ、それとともに記憶の在りかたが問われていた。そのひとつの象徴が、ブーランジスム失敗の後、フランスの右翼ポピュリズムの根源となる記憶のイデオロギーを準備した、デュルケームの同時代人、モリス・バレスである。バレスが導かれたのは、「一方で実証主義・主知主義・合理主義の否定としての本能や無意識の賛美、他方で個人主義の否定としての国民共同体の称揚という、近代イデオロギーを逆転した観念」であった (深澤 1999: 370-7)。そうして掲げられることになる、バレスの「大地と死者」のナシヨナリズムは、人間は本能によって、地域から国民へと拡大する地理的集団 (≡ 共同体) への同一化と、共同体の連続性 (≡ 伝統) への同一化とを果たすことで、真のアイデンティティを

形成しうる、という保守的な教義である (深澤 1999: 124)。「物質的で無意識的な記憶 (mémoire)」や「土の記憶 (mémoire)」に支えられている (Namer 1994: 301)。⁷ バレスの教義はシャルル・モラスらへと受け継がれ、フランス・ファシズムを準備する母体となっていく。アルヴァックスが青年期以降、直面してきたのは、こうした反合理的・近代的で、その限りにおいて集合的な記憶観だった。

したがって、ベルクソンが「一九一八年の余波を受けたイデオロギー的反動の象徴」(Namer 1994: 318)と看做されていたという事情のうちに、アルヴァックスがかつての師を仮想敵に設定した動機のひとつを見出すことはできる。だが、こうした整理だけでは、「一九二三年から一九四四年まで、アルヴァックスの唯一の社会学ノートは事実上、記憶作用の社会学に費やされていた」(Namer 1994: 318)と、『集合的記憶』に至るまでベルクソンへの批判的態度が維持されていることの原動力までは推察できない。

コーザーがそうしたように、ナメルもまた暗に前提しているように思われるが、そもそも、アルヴァックスの議論を構築主義的で合理主義的という性質のみに回収することには無理がある。アルヴァックスは『枠組み』の段階から、記憶現象のメカニズムを、現在の政治力学に支配される、合理的で現在主義的なものとしては考えていない。むしろ、その理論は「記憶作用の現在主義的な側面と累積的な側面の双方に目を配ると同時に、両者のせめぎ合いとい

うダイナミズムにも着目する理論なのである（金 2020b: 89-95）。

とはいえ、アルヴァックスが自らの試みとベルクソン哲学とを鋭く対照化させることによって、「記憶作用の社会学理論」を展開したことは事実である。であれば、その争点はどこにあるのか。

それは、「ベルクソンが物質には還元できない記憶作用の精神的な次元を論じたのだとすれば、アルヴァックスは物質には還元できない記憶作用の社会的な次元を論じた」点にある（金 2020a: 279）。あるいは、ベルクソンの記憶観は「孤立した存在」（CS VI = 8）として人間にもとづいていると批判されるように、両者の違いは人間観の違いにあるとも言える。

こうしたアルヴァックスの立場を端的に表現しているのが、「記憶は外部から私に呼び起こされる」（CS VI = 9）という命題である。彼は、記憶は脳などの物質に保存されるという記憶を物質に還元する把握の仕方だけでなく、精神において過去それ自体が保存されるという精神的な次元の純粋性への信奉をも否定し、記憶現象を集団や他者との関係のもとで把握しようとする。

アルヴァックスからすれば、ベルクソンの記憶論は「無意識状態での記憶の存続というテーゼ」（CS VII-VIII = 10）にもとづく、「私」の内部（＝精神的な次元）に閉じたものである。それに対して、アルヴァックスは意識の外にある記憶としての無意識を想定しないことを前提に、「私」の内部に表現される記憶は「私」が外部（＝社会的な次元）に開かれているからこそ生まれると考える。

アルヴァックスによれば、外部に開かれているということは記憶作用がきわめて意識的なものとして働いているということを意味している。そのような主張を支えているのが、知覚は「社会的なディシプリン」のもとにあり、知性は直接的・間接的に他者からもたらされた言語的な観念によって成り立つという認識である（CS 9 = 85）。思い出すという営みは、記憶の位置づけや対象への名づけ、反省といった、集団の思考様式に則った知的・分析的で、意識的な働きによって可能となる（CS 23 = 38）。

ただし、記憶は「私」の内部において表現される以上、そうした想定は当然、内部の抹消を意味しない。そうではなく、脱構築的に内部の純粋性を突き崩すことが目指されているのである。

アルヴァックスはベルクソン哲学に対していろいろなことを言っているように見える。だが、その姿勢は基本的に一貫している。彼の「記憶作用の社会学理論」はある種の過剰さをそなえてはいるけれど、それは、心理学や哲学から自律した、記憶現象の把握の仕方を追いつめた結果なのである。

3 アルヴァックスの「プラトニズム」?

アルヴァックスは『枠組み』の「結論」で、彼のベルクソン批判を貫く支柱を、次のように簡潔な一文で示してみせている。ベルクソン哲学は「これまで試みられなかったほど明確に、イメージと呼

ばれるものと概念 (concept) と呼ばれるものを対立させた」(CS 279 = 366) 一。

アルヴァックスによれば、ベルクソン哲学の体系においては、「イメージは関連する想念すべて、知的な意味作用すべてから解放されることによって定義」され、「概念はあらゆるイメージを取り除くことによって定義されている」(CS 279 = 366)。⁽²⁾つまり、イメージと概念とが鋭く区別されている。それに対して、アルヴァックスは、個々具体的で身体的・感覚的であるがゆえに体験的＝精神的な次元にあるイメージと、他者と共有されている意味的＝社会的な次元にある概念とは純粹には切り離しえない、それどころか、そもそもイメージは社会的な意味作用抜きには構成されえないと考える。

アルヴァックスは想起を過去の再構成だとみなし、想起の度に「かつてのイメージはすでに著しく変化させられている」(MC 119 = 23)と書く。こうした主張が可能となるのは、彼にとつて、記憶はイメージだけに還元されるのではない「意味を伴う表現 (expression)」(金 2020b: 30) だからである。

この「イメージと概念の峻別」批判には、「私」の内部の純粹性を突き崩すというベルクソン批判の姿勢を根本で支える、アルヴァックスの基本的な認識があらわれている。その限りにおいて、

(2) アルヴァックスはイメージでもあり概念でもあるような、その中間的な位相として想念 (notion) を想定している。ただし、この想念概念はほかの諸論考においても散見される一方で、術語としてどれほど明確に定義されているのか微妙なところがある。とはいえ、この考え方が彼の議論において重要であることに変わりはない。

この批判の意義を理解するのに、それほど苦勞はないようにも思われる。

ところが、「イメージと概念の峻別」批判をめぐるのは、じつはやっかいな問題がある。それが、先に述べた、アルヴァックスがプラトンとスピノザのイデア論を参照することによって、ベルクソン批判を哲学的に裏付けようとしたという謎である。

アルヴァックスが「ベルクソンの『プラトニズム』を破棄しているのは明白である」(山下 2005: 44)と言われる。それは、物質だけでなく精神にも記憶は保存されないという彼の立場が、魂がかつて観照したイデアを真の記憶であるとするプラトンやその思想に連なる西洋哲学の伝統的記憶観をひっくり返した地点を指したものであるからだ。だがじつは、アルヴァックスは、ベルクソン哲学を批判するために「プラトニズム」に頼っている。

この問題のやっかひさは、ベルクソン批判のためになされる哲学的議論がアルヴァックスの記憶論にどのような効果をもたらしているのが判然としない、あるいは蛇足にさえ見える、という点にある。なぜ、「イメージと概念の峻別」批判はイデア論に依拠して論じ直されなければならなかったのか。

では、アルヴァックスは実際に、どのような議論を展開している

のか。という風に話を進めたいところではあるが、そうするのにも限界がある。なぜなら、アルヴァックスがイデア論に言及しているのは、原文にして1ページ弱に過ぎず、そうして圧縮されているがゆえに不可解な点も多いからだ。たしかに、イデア論が集合表象論や個人意識のあり方の議論と関わることが示唆されている。だが、それ以上の説明はない。

「イメージと概念の峻別」批判の重要性については、金 (2020a) がすでに指摘しているが、それと同時にその哲学的議論を追究することの難しさも指摘されているように、なかなか手がかりが見当たらない。それを愚直に追おうとすれば、アルヴァックスが示唆するように形相と質料の関係をめぐる古くからの哲学的議論に巻き込まれていくだろう。金が述べる通り、そうした哲学的な思索が記憶の社会学の一側面を見直すうえで必要であることに異論はない (金 2020a: 281)。だが、本稿の関心はそこにはない。

前置きが長くなってしまった。実際のテキストを確認しておこう。それは次のような一文から始まる。

プラトンについての現代の解釈者たちは、プラトンの理論は、彼がその理論を構想し発展させたギリシアの民衆の考え方と無関係なものではなかったということを描いている。(CS 280 = 366)

そして、次のようにつづく。

ギリシア民衆の想像力が勝利、愛、笑い、死、哀れみ、健康、富といった神々を作り出したとすれば、それは彼らが想像によってそこに活動的な力を見て取っていたということであり、人びとが自分や他者のなかに生き生きとした働きを感じ取っていたということである。それはたんなる擬人化ではなかったが、もはや抽象化でもなかった。人びとがそのように感じていたとすれば、同様に、正義や美徳を、活動的で永遠なる力、一切の現世の事物を超えた力として考えるのも自然ではないだろうか。詩人や芸術家たちはその先駆けである。おそらくプラトンは、正義の女神を作り出したのではない。むしろ彼は、中立的な指示によって、あらゆる人格的な要素をそこから取り除くことを念頭に置いていた。しかし、彼にとってそれは抽象化とは対極にある。それは概念ではない。概念を超えたものであり、実在するものである。したがって、プラトンのイデアは、「属性 (attributs)」すなわち抽象的に考えられた性質ではなく、人格ではないにせよ「主体 (sujets)」を示している。(CS 280 = 366)

アルヴァックスは、プラトンが言うところのイデアとは、ギリシアの人びとが共有する理念をたんに擬人化あるいは抽象化したもの

ではない、つまり、イメージ化あるいは概念化したものではない、それ以上のもの、実在だとしたうえで、それが「主体」だと考えている。⁽³⁾

だが、この独特な、そしてどこか危険にも思われるプラトンのイデア論理解についての検討はここで一度、立ち止まるほかない。というのも、彼が残したプラトン解釈はこれですべてと言ってよいからである。では、どうすればよいのか。

この短い文章を注意して読んでみると、あることに気が付く。それは、アルヴァックスが、プラトンのイデア論を、その内容というよりも、その理論が生まれた状況という観点から解釈しているということである。ここに、手がかりの気配のようなものを感じる。それは、アルヴァックスにこのような理解を可能にした、「プラトン」についての現代の解釈者たち」にある。では、それは誰か。

4 アルヴァックスがベルクソン批判のために プラトンのイデア論を参照した謎を追って

4-1-1 「プラトン」についての現代の解釈者たち」

謎はどこから、そしてどのように持ち込まれたのか。その手がかりは、「プラトン」についての現代の解釈者たち」にある。アルヴァッ

クスは『枠組み』の「結論」に付した注釈のなかで、彼のプラトン論の参照先として、そのうちのひとりの名を挙げています。それが、ドイツの文献学者ウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ・メーレンドルフである。

アルヴァックスは一八七七年、シャンプーニュ地方ランスに生まれた。父ギユスターヴはドイツ語教科書を著した学者であった。なお、アルヴァックスはベルクソンから離れた後、ゲッティンゲン大学の奨学生としてライプニッツ哲学を研究し (Becker 2003: 25)、社会学に接近して以降も、マックス・ウェーバーをいち早くフランスに紹介するなど、ドイツの社会科学を紹介する論考をいくつか書いている。

とはいえもちろん、こうしたドイツへの「近さ」が、ベルクソン批判を哲学的に方向づけるといふ大役を、わざわざヴィラモーヴィッツに任せる理由にはならない。そのプラトン論の具体的な内容を確認する必要があるだろう。以下では、ヴィラモーヴィッツの『プラトン』(1919)について、主に佐々木毅 (1998) を参照しながら整理してみよう。

二〇世紀以降、プラトンの、とくに彼の『国家』の政治性をめぐって、さまざまな議論が沸き起こった——カール・ポパーの『開かれた社会とその敵』(1945) がひとつの代表例であるように、第二次

(3) 本稿ではアルヴァックスのプラトン論のみに焦点を当て、スピノザ論については議論しない。他方、ナメル (1991) はスピノザ哲学との関係のもとで概念概念について何度か言及している。「イメージと概念の峻別」批判をめぐる哲学的議論を追っていくうえで、ナメルや金の指摘を併せて検討する必要がある。

世界大戦後は否定的なものが目立つようになるのだが。納富信留(2012)によれば、『国家』はプラトンが五〇代をむかえた壮年期、イデア論を中心とする独自の哲学を展開している時期に書かれたと通常推定されている。新プラトン主義以来、プラトンの代表作は宇宙論を主題とする『ティマイオス』であった。プラトンはなによりも哲学者として見られていたのであり、論究されていたのはもっぱらその思想の体系性についてである。だが、一九世紀中頃のイギリスとドイツを中心に、『国家』への関心の移行という大転換が起こる⁽⁴⁾。古代哲学の最重要著作となった『国家』は20世紀に入ると次第に政治的な読解の対象となる。

その後、プラトンの諸著作を文体の特徴から時期的に区別して、その「発展」を見つけたそうとする文献学的な試みが広がっていく。そうして、「発展」がプラトン論の出発点となる場合、その解明には、哲学的概念の展開に焦点を合わせる、もしくは諸作品を書いた著者に重点を移すという二つのやり方が見られた。

ヴァイモーヴィッツの『プラトン』はこの後者の方法論的な転換に先鞭をつけたもののひとつである。それは、哲学的分析というよりは伝記的な意味合いが強いものだった。つまり、彼のプラトン理解の特徴は、諸著作それ自体ではなく、それらを生み出したプラトンという人間に重点を置くところにある。

(4) フランスでは一九世紀以降、プラトンのフランス化が起きていたという。すなわち、プラトンは「デカルト的近代性の遠い先駆者」であり、「現実世界を数学的に描きだす」哲学者として受容されていた(Cahnほか2016)。

ヴァイモーヴィッツはその序文で、「プラトンは、同僚たちだけが理解できるような哲学の教授ではなかった。彼はそれ以上の存在であろうとした。私は彼が何を望み、いかなる人物であったのかを示したい。私は人間を示そうと思う」(Williamowitz [1919] 1920: 3)と書いている。彼はプラトンという人間が「いかにして生まれ、何を望み、何を考え、何をしたかを理解すること」(Williamowitz [1919] 1920: 4)を目指して、プラトンを、彼が生きた同時代のなかに置き、そのなかで彼の経験や個性を把握しようとする。この試みは、「哲学者プラトン」から「人間プラトン」へ、という「哲学者たちが長年にわたってプラトンの作品から体系を構成しようとしてきた作業そのものを見直す、という野心的な試み」(佐々木1998: 56)であった。

「プラトンについての現代の解釈者たち」は文献学的・実証主義的な手続きによって人間プラトンを記述する。アルヴァックスは、この人間プラトン論に導かれて、プラトンのイデア論はプラトンが生きたその時代にギリシア民衆のあいだで共有されていたものの理論化であったという理解を得た。そうして得られたのが、経験的なイデア論と呼べるようなものである。

アルヴァックスが手にしたこの経験的なイデア論とは、なによりも、人びとの体験(イメージ)と人びとのあいだで共有される意味

(概念)とは峻別しえないことを表している。アルヴァックスはベルクソンに対抗するために、西洋哲学の伝統の根幹をなすイデア論を、当時隆盛しつつあった反―伝統的な読みかたで参照したのだと言える。アルヴァックスにしてみれば、こうした経験的なイデアの在りかたこそが、ベルクソンが見逃した、集合的な記憶作用が存在することの証明なのであった。

4-2 アルヴァックス理論の危険性と誤読的なプラトン読解

しかし、経験的なイデア論に依拠して、記憶作用の集合性を見出すことには危険がある。その危険はなにより、人間プラトン論を参照することそれ自体にある。引き続き佐々木(1988)を参考に、先ほどとはやや異なる角度からヴィラモーヴィッツのプラトン論を見てみよう。

ヴィラモーヴィッツは、プラトンという人間を「政治家、アテナイ及び全ギリシアの改革者」(佐々木 1988: 58)とみなす。だが、それはあくまで人間プラトンに文献学的に接近するなかで現れた人物像である。それゆえ、ヴィラモーヴィッツはプラトンの政治論について直接評価しているわけではなく、むしろ、その教説を現実世界と接合させる向きには距離を取っているように見える。しかしじつのところ、『プラトン』にはドイツ敗戦の影が色濃くあらわれているという。

『プラトン』と同時期、ヴィラモーヴィッツは「ギリシア的・プ

ラトンの国家観」(1919)という小論を書いている。彼はその論考で、『国家』における国家構想はユートピア的であるという伝統的な見解を否定しながら、ドイツの現状への憤りを、プラトンがアテナイの状況に向けた批判に重ねる。つまり、ヴィラモーヴィッツの人間プラトン論にはすでに彼の政治的な思惑が強く反映されていたのである。

この背景には、一九世紀末以降のドイツ社会で、急激な工業化が起るとともに民主化が進み、近代政治が唐突なかたちで出現したという事情がある。こうした変化は、それまで社会・文化的エリート身分にあった大学教授や官吏といった教養市民層に大きな打撃をあたえた。大学界の重鎮であったヴィラモーヴィッツは「没落」に瀕した当時の読書人層を代表する人物であったのである。

フリッツ・K・リンガー(1969)によれば、そのような状況において、読書人層のなかでは近代への向き合いかたをめぐって「正統派」と「近代派」との分裂が生じることとなった。後者は、近代社会への適応と社会の改革の必要を説き、民主政治の運営によって停滞か革命かという二者択一を回避しようとする立場である。その代表は、ウェーバーやフェルディナント・テンニースらであった。他方で前者は、平等主義的な民主主義の脅威を説き、議会政治などに嫌悪感を表明する立場であり、過激なナシヨナリズムを説くとともに、容赦ない現状否定とワイマール体制批判を繰り返した。ヴィラモーヴィッツはこちらに属している。

正統派は社会主義と物質主義に対抗して理想主義を力説するのであるが、そうした論議の最後の助けとしてしばしば選ばれたのがギリシア古典であり、なかでも『国家』は特別な意味をもっていた。

つまり、「現実が民主化と大衆化を辿れば辿るほど、プラトンの議論はますますそれと対決する方向で動員される可能性をヴィラモーヴィッツの所説ははっきりと示唆している」（佐々木 1998: 70）。さらに言えば、ヴィラモーヴィッツ以降には、ゲオルゲ派が、そしてナチス政権がそれぞれかたちを変えながら「プラトン」を動員していく。

アルヴァックスは、プラトンのイデア論を、人間プラトン論をベースにした解釈学的手法によって撰取しながら、そこに記憶作用の集合性を見出す。それゆえ思想的な観点から見直してみると、彼の記憶理論は政治化されたプラトン像とその政治利用へと連絡する途を自ら作り上げてしまっている。あるいは、その理論にはそもそも、そうした可能性が存在していたことを意図せず暴露する羽目に陥っている。

では、アルヴァックスは「プラトンについての現代の解釈者たち」が隠し持っていた政治的な意図に気が付かなかったのだろうか。おそらくそれはありえないだろう。先に述べたように、アルヴァックスは社会科学系を中心に、ドイツのアカデミズムにも通じていたのであり、その動向には目を配っていたはずだ。また、合理主義的思想家であるアルヴァックスの立場は、ヴィラモーヴィッツらの正統

派にはなく、ウェーバーらの近代派に近いものであるし、フランス・ファシズムを準備した論者たちを援護するような論理展開を好んでおこなったとも思えない。

それゆえじつは、アルヴァックスは『国家』を、そしておそらくは政治化されたプラトン像それ自体を避けようとする一方で、その暗路から逃れようとしている。そのことは、ヴィラモーヴィッツの名が挙げられたのと同じ注釈でなされた議論から読み取れる。アルヴァックスはそこで、『国家』(507B) においてはイデアは完全にイメージから切り離されているが、これはプラトンのイデア論にとってはあくまで「事後的な発展」にすぎないと主張する (CS 280 II 85)。つまり、彼は、『国家』という、西洋哲学の基盤をなすイデア論が開陳されたと一般に評される作品を、プラトンのイデア論の埒外にあるとみなすというアクロバティックな、もつと言えば、誤読的な読解のもとでそのイデア論を参照している。

5 『枠組み』の断絶を架橋する試み

ここまでの内容を一旦、整理しておこう。アルヴァックスはベルクソン哲学の体系のうちに「イメージと概念の峻別」を見出しそれを批判した。そして、プラトンのイデア論を解釈学的に理解することで、その批判を哲学的に裏付けようとした。その独特なイデア論解釈はヴィラモーヴィッツの人間プラトン論にもとづいている。し

かし、アルヴァックスはそうしながらも、人間プラトン論の裏に隠されていたプラトンの政治化という思惑を避けるかのように、『国家』をイデア論から除外するという誤読的なプラトン理解を選択している。そのようにややこしい手続きを踏んでまでアルヴァックスが目指したのは、「イメージと概念の峻別」批判を、経験的なイデア論によって哲学的に基礎づけることであつた。それは、プラトンの伝統を、誤読的なプラトン読解によって転倒させ、結果的に「ベルクソンの『プラトニズム』を破棄」という企画であつた。

ところで、じつは、この試みこそがアルヴァックスなりの『枠組み』の断絶の架橋だつたと言える。どうということか。

あらためて同書の断絶について確認しておこう。『枠組み』の第1〜4章と第5〜7章とは水準の異なる議論がおこなわれている。前半セクションは個人心理を対象にした心理学的分析であり、アルヴァックス自身によって「記憶作用の社会学理論」と呼ばれた。他方、後半セクションは家族・宗教・社会階級といった社会集団を対象にした社会学的・歴史学的分析であり、「集合的記憶論」に相当する。『枠組み』の断絶とは、「記憶作用の社会学理論」／「集合的記憶論」の断絶であり、これはアルヴァックスが捉え直そうとした「心理学に委ねられてきた記憶という領域」／「社会学の対象としての」記憶という領域の断絶を意味する。

では、なぜ誤読的なプラトン読解という不安定なものに頼つたべルクソン批判がその架橋だと言えるのか。

その外形的な証拠として、『枠組み』の「結論」の構成を挙げることができる。「結論」はアルヴァックスによって三つのパートに区切られている。第一パートは「本書の前半部分では、心理学者たちの議論をあえて彼らの領域のなかで辿つた」という1節で引用した言述から始まり、前半セクションにおける心理学的分析についての整理がされている。このパートでは、個人心理を対象にする方法的な議論、夢に関する議論の意義がまとめられたうえで、前半セクションを貫く言語活動論の重要性が再確認される。第三パートでは、後半セクションを伝統と理性という観点から整理しつつ、最後に全体のまとめがおこなわれている。

問題は第二パートである。このパートは、ベルクソン哲学への「イメージと概念の峻別」批判から始まる。そして、イデア論解釈、枠組みについての議論などが続き、それらが記憶の位置づけ論として再整理され、そこからシームレスに、家族・宗教・社会階級に関する議論がまとめられる。つまり、「イメージと概念の峻別批判」とそれを基礎づけるイデア論(第二パート前半)は、テクストの位置関係的に、心理学的分析Ⅱ「記憶作用の社会学理論」(第一パート)と、家族・宗教・社会階級についての「集合的記憶論」(第二パート後半)とを結ぶところに置かれている。

こうしたいわばマテリアルなレベルでの考察が、一定程度、妥当であるとすれば、アルヴァックスは「記憶作用の社会学理論」から「集合的記憶論」へという単線的な展開には無理があることを自覚

していたと言えるだろう。そして、その転調の不自然な切れ目を繋ぐものとして置かれているのが、誤読的なプラトン読解を用いたベルクソン哲学批判なのである。

だが、その内容面、すなわち独特なプラトン理解から引き出される効果が、予測されたとおりに発揮されているのかと言えば、残念ながらそうは言えない。

アルヴァックスにとって、プラトンが言うアイデアとはギリシアの人びとがイメージと彼らが同時代的に共有している概念によって集合的に形成された実在である。彼は、こうしたヴィラモールヴィッツ由来のアイデア論解釈から「プラトンのアイデアは……『主体』を示している」という結論を導き出しているのだった。

この、「主体」としてのアイデアという想定を考えるうえで、大きな意味をもつのが、『枠組み』の後半セクション冒頭でなされる、「集団それ自体に想起する能力がある」とみなすこととする」(CS 146 II 199)という宣言である。

アイデアを主体とみなすというプラトン読解から得られた帰結は、この宣言に見られる、集団それ自体に想起能力があるという想定、すなわち集団を主体として扱う「集合的記憶論」的想定を強く支持する。つまり、経験的かつ集合的に形成された主体としてのアイデアという想定は、集団それ自体が記憶作用をもつことの証明としてある。アルヴァックスはこうした観点から前半セクション全体を貫くベルクソン哲学批判を哲学的に論じ直すことで、「記憶作用の社会

学理論」から「集合的記憶論」への転調を、事後的に成り立たせようとしている。

だが、それは架橋になりえていない。というのも、前半セクションから後半セクションへ移ろうとする時、それまでの心理学的分析がなれば切り捨てられてしまうからだ。

集団を主体とみなすという想定については、『枠組み』刊行当時から批判されてきた。その批判者のひとり、マルク・ブロックである。ブロック(1925)は、『枠組み』が、それまで個人主義に偏重してきた記憶論にもたらした転回を肯定的に評価しながらも、記憶作用に「集合的」という形容詞を付すことには慎重であるべきだと批判する。記憶現象はあくまで個人における現象なのであって、集団が個人と同じような資格のもとで想起するかのよう¹に想定してしまうと、集団を自明の実体として扱ってしまう危険がある。

またこの問題は、集合的な記憶作用(memoire collective)というアルヴァックスのキー概念に関するダブルスタンダードを引き起こしている。金によれば、アルヴァックスの言う、集合的な記憶作用とは、「個人は集団の視点に基づいて過去を記録・保持・想起するがゆえに、純粹に個人的な記憶作用を想定することは困難であり、記憶作用はつねに集合的なプロセスたらざるを得ない」ということを表している(金 2020b: 13)。「枠組み」の前半セクションII「記憶作用の社会学理論」では、集合的な記憶作用という語は確かにこの意味で用いられている。しかし、「集団それ自体に想起する

能力があるとみなすこととする」という宣言が発せられることにより、後半セクションにおいては、集合的な記憶作用という語の意味内容が、なかば実体化されそのうえ主体の地位までもあたえられた、集団そのものがそなえる想起能力へと変換されてしまう。

プラトンのイデア論を参照することによって得られた主体としてのイデアという想定は「記憶作用の社会学理論」とはかけ離れたところにある。それはあたかも、アルヴァックス自身が、集団ないし経験的なイデアを主体とみなすという暴力的な想定をしなければ、記憶現象に関する社会的分析は可能でないと認めているかのようである。

「イメージと概念の峻別」批判は、誤読的なプラトン理解を経由することで、集団を主体とみなすという想定を支持するために機能することとなり、「集合的記憶論」の基礎づけというポジションに墮してしまふ。その試みは結果的に、(経験的なイデア＝主体)という哲学的議論に、前半セクションの心理学的・哲学的分析が飲み込まれるという事態を招いている。アルヴァックスはプラトンやスピノザを持ち出してまでベルクソン哲学批判を試みたが、それによつては／それだけでは、『枠組み』の断絶を架橋することができなかつた。アルヴァックスはそこで躓いている。

6 『枠組み』の断絶にあるもの

本稿は『枠組み』を断絶しているものへの関心をもとに、そのうち心理学的側面を精査することこそが、アルヴァックス理解を前進させるとともに、記憶の社会学の再考につながるという前提のもとで始まった。アルヴァックスのベルクソン哲学批判を追うことは、その基本方針として定めたものである。彼のベルクソン批判の要点は「イメージと概念の峻別」にあり、その批判を哲学的に基礎づけるためにプラトンのイデア論が誤読的に参照される。そしてじつは、その哲学的議論は『枠組み』の断絶に対処する役割を期待されていた。だが、アルヴァックスの試みは、自らが発した、集団を主体とみなすという乱暴な宣言に回収されてしまひ、その限りで彼の試みは失敗していると思われる。結局、「記憶作用の社会学理論」は記憶の社会学という領域からなれば追いついてしまひ、「集合的記憶論」だけが現代にまで生き残ってしまった。

しかしまた、そうした試みを、たんに「失敗」という言葉で括るのはそれこそ素朴な理解でもある。そもそも社会的な記憶観なるものが確立していないこの時期には、心理学との差異化が必要であった。さらに言えば、その理論の限界が、アルヴァックス自身が「記憶作用の社会学理論」を、現在、記憶の社会学理論として一般に理解されているような「集合的記憶論」へと強引に一元化しよう

としてしまったことにある、と理解できるとすれば、『枠組み』の断絶は現行の記憶の社会学にとっても重大な課題なのではないかと思われる。ということか。最後に、このことについて簡単に触れておきたい。

「集合的記憶論」という一般的な印象に反して、アルヴァックスは『枠組み』の前半セクションを、ジークムント・フロイトやテオデュール・リボーなどの精神分析・心理学、ピエール・マリーやヘンリー・ヘッドらの神経学、ポール・ブローカやカール・ウエルニツケの解剖学などといった「記憶の科学」に多くを取材して作り上げている。言語活動（の体系や記号体系）と記憶作用は不可避的に関係しているという『枠組み』のテーマ、さらにはベルクソン批判までもが、じつはこれら記憶の科学への参照のもとで展開されている。

このことは、「記憶作用の社会学理論」が、アルヴァックス対ベルクソンという二者関係に収まらず、記憶の科学という第二の参照点をもつことを示している。だとしたら、アルヴァックスは不当にもあまりに多くのことをベルクソン哲学（批判）に賭けてしまったとも言えるだろう。彼はその哲学を過大評価している。だが、見方を変えれば、本来重要な役目を担っていたはずの記憶の科学という参照点を再導入すれば、アルヴァックス理論は後世の論者、そしてアルヴァックス自身によって想定されてきたよりも、もっと広い視野のもとで把握しうる、と考えることもできる。

イアン・ハッキング (1995) は、記憶の科学が一九世紀末に生ま

れた新しい科学であること、そして記憶の科学によって新しいタイプの記憶の政治学が生まれたことを指摘している。それは、個人が経験した過去をめぐる争われる、個人の記憶の政治学である。この新しいタイプの政治学は、旧来の、共同体的な記憶の政治学とは異なるものとして現れるとともに、後者とのあいだに相互的な影響関係を生み出した。

このハッキングの指摘を参考に、アルヴァックスが一九二〇年代に記憶現象を論じ始めたその背景に、記憶の科学の誕生という出来事を付け加えたうえで、『枠組み』の断絶をあらためて覗いてみると、そこにはトラウマという問題が渦巻いているのが見える。というのも、ハッキング曰く、トラウマは、ホロコーストに代表されるように、個人的記憶と集合的記憶とが相互に連絡する様子がはっきりと現れる場であるからだ (Hacking 1995: 211 = 1998: 261-2)。この観点からすれば、アルヴァックスがやり損なったのは二つの記憶の政治学の連絡であると読み直しうる。言い換えれば、その「失敗」はトラウマを論じえないということの意味する。

アルヴァックス理論はたびたび無意識的な記憶現象の適用外にあると批判されてきたが (cf. Blondel 1926)、トラウマ性記憶はまさにその代表である。しかしまた、現代の人文社会科学的な記憶研究もいまだにトラウマを満足に捉えきれない以上 (cf. 直野 2018)、⁽⁶⁾ おそらくその原因にあるのは、アルヴァックスの属人的ないし時代的限界のみに回収できる類のものではない。だとすれば、われわれ

はアルヴァックスと同じ石に躓き続けている。

この地点で、われわれはすでにアルヴァックスを越え出ようとしている。だが、彼が「われわれは記憶が喚起される前に、記憶について話している」(CS 279 = 365)と書くその裏にはじつのところ、記憶の科学の影響がある。⁽⁶⁾それゆえ、アルヴァックス(のネガ)からトラウマへ、という途を想定することはなにも空想的なものではない。むしろ、アルヴァックスのなかに兆していながら、彼自身によつては十分に探究されなかった、あるいは捨て去られた可能性を索める試み、たとえば「アルヴァックスはいかにしてトラウマを論じうるのか」と問うてみることは、社会学がトラウマと接しうるレイヤーを見極める試みであると同時に、記憶の社会学を、哲学や心理学、精神分析との緊張関係のもとに置き直すための試金石でもある。それは、アルヴァックスの「失敗」をあえて失敗として受け取りそれを反省することの先で、社会学の対象としての記憶という領域を見直し、あらためてそこに踏み込むことを意味する。

付記

本研究はJSPS 科研究費22k01938の助成を受けている。

(5) そもそも、「外傷性精神障害自体、またその実態は現在明らかにされつつある途上であり、理論的解釈についても試行錯誤の状態である」という指摘もある(宮地 2019: 172-3)。

(6) アルヴァックスは『枠組み』において、ヘンリー・ヘッドの戦争失語症者についての実験を参照することを介して、じつは「外傷」という問題に触れている。

参考文献

*本文中にて引用・参照する際、「記憶の社会的枠組み」を[CS]「集合的記憶」を[MC]と二重略号を用いて表記する。

- Becker, A., 2003. *Maurice Halbwachs: Un intellectuel en guerres mondiales 1914-1945*. Paris: Agnès Viénot Édition.
- Bloch, M., 1925. "Mémoire collective, tradition et coutume." *Revue de synthèse historique*, 14: 73-83.
- Blondel, C., 1926. "Revue critique." *Revue Philosophique*, 101: 290-298. (金珠訳 2021「書評：M. アルヴァックス『記憶の社会的枠組み』」『社会システム研究』24: 399-409.)
- Cain, R., Périillé, J-L., Tinand, O., 2016. "Préface." Cain, R., Périillé, J-L., Tinand, O., ed. *Platon et la philosophie française contemporaine : Enjeux philologiques, historiques et philosophiques*. Bruxelles: Ousia.
- Coser, L., 1992. "Introduction: Maurice Halbwachs 1871-1945." *On Collective Memory*. Chicago: The University of Chicago Press, 1-34.
- 深澤民司' 1999. 「フランスにおけるファミズムの形成」岩波書店
- Hacking, I., 1995. *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of Memory*. New Jersey: Princeton University Press. (北沢格訳' 1998「記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム」早川書房)
- Halbwachs, M., [1925] 1994. *Les cadres sociaux de la mémoire*. Paris: Albin Michel. (L. Coser. trans., 1992. "The Social Frameworks of Memory." *On Collective Memory*, 35-189. 鈴木智之訳' 2010『記憶の社会的枠組み』青弓社)

- , [1950] 1997, *La mémoire collective*, Paris: Albin Michel. (小関藤一郎訳, 1989, 『集合的記憶』行路社)
- 浜日出夫, 2002, 「序にかえて」『現代社会理論研究』12: 1-2.
- , 2007, 「記憶の社会学・序説」三田哲学會『哲学』117: 1-11.
- 金瑛, 2020a, 「解題」, 「翻訳」『記憶の社会的枠組み』結論(2)『社会システム研究』23: 277-85.
- , 2020b, 『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房.
- 宮地尚子, 2018, 『環状島トトラウマの地政学』みすず書房.
- , 2019, 『トラウマの医療人類学』みすず書房.
- Nanner, G., 1994, "Postface," dans Halbwachs, M., [1925] 1994, 297-367.
- , 1997, "Preface," dans Halbwachs, M., [1950] 1997, 7-12.
- 直野章子, 2018, 「出来事とトラウマの在り処——トラウマ論が示す歴史の方法論をめぐって」田中雅一・松嶋健編『トラウマを生きる』京都大学学術出版会, 87-118.
- Ringer, F., K., 1969, *The Decline of German Mandarins: The German Academic Community, 1890-1933*, Cambridge: Harvard University Press. (西村稔訳, 1991, 『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』名古屋大学出版会)
- 佐々木毅, 1998, 『プラトンの呪縛——二十世紀の哲学と政治』講談社.
- 山下純昭, 2005, 「記憶の観点からの演劇研究(2)」『千葉商大紀要』43(2): 31-50.
- Wilanowitz, U., [1919] 1920, *Platon I^{er} Band: Leben und Werke*, Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.